

赤目の里山に生きる

世界でもっとも小さいハッチョウトンボ

2005年6月21日、26日撮影



オスのハッチョウトンボ



ハッチョウトンボのメス



クモの巣に引っかかったハッチョウトンボ



飛行中のハッチョウトンボ

ハッチョウトンボ(八丁蜻蛉)

名前の由来は2説ある。

- ①名古屋付近の矢田鉄砲場八丁目に多数生息していたからこの名前がついた。
- ②京都市左京区の北端の八丁平湿原で生息していたからこの名前になった。

ハッチョウトンボは世界でもっとも小さいトンボで体長16ミリ～20ミリ。この写真のオストンボは約20ミリと推測される。かつては各地で見られたが、今では絶滅が危惧されている。

日本のトンボはこれまでに196種が記録され、亜種レベルで区別される18を加えて214種。世界では約5500種。ヨーロッパ全域で116種なので、日本のトンボの種類は多い方。

世界で一番大きいトンボはオーストラリアにいるテイオウムカシヤンマで体長15センチ前後。

ハッチョウトンボの幼虫は常にわき水のある湿地のドロの中に生息。成虫はほとんど湿原を離れることがなく6～7月に多く見られる。成熟したオスは1～2メートルのなわばりをつくり、接近してくる他のオスを追い払うが、メスが近づくと空中で捕まえて交尾。メスはなわばり内の浅い水たまりの水面に産卵。オスは、メスの産卵中は空中でボバリングしてメスを守り、他のオスが近づかないように警戒している。メスが産卵したタマゴは水中の昆虫が待ちかまえて食べたり、ホバリング中のオスが鳥に食べられる事もある。

ハッチョウトンボはモウセンゴケの生えた日当たりの良い浅い湿地を好むが、このような生息地は草丈の高い草が生えるようになり、他の昆虫や水性動物が住み着くと姿を消す。生育環境の保全の決め手は水たまりの整備。常にこまめに手入れをする必要があるが、この作業が実は相当に過酷。誰もやりたがらない作業でもある。

文責＝里山保全リーダー受講生・芝田 香象